

# 東京理科大学報

発行所  
東京都新宿区神楽坂1-3  
東京理科大学広報委員会  
(3260) - 4 2 7 1

## 近代科学資料館開設へ

理事長 橋高重義

本学では創立一一〇周年を記念して神楽坂校地に近代科学資料館を建設中で、工事は十一月十九日の竣工式に向けて仕上げの段階に入っております。

敷地は六号館と道路を隔てた研究社の裏地で、敷地面積九四七㎡(二八六坪)、建物は地下二階、地上五階建、延床面積二九〇〇㎡(八七七坪)です。その内、一階フロアー五四〇㎡が近代科学資料館展示場となります。

科学博物館の建設構想は、数年前より検討されておりました。それは、科学技術の進歩により、開発当時の根源をとどめないものが多くなっていく現在、創造性豊かな人材を育成するためには、開発の初期から発展のプロセス、現在に至る改良の経過などを知る必要があります。これらを明示するための施設、すなわち科学博物館を創設する必要がありますというのが基本的な発想です。

また、日本が近代科学を導入した明治初頭、唯一の理学系の私学として発足した本学には、不幸にして戦災のために焼失したり、校舎の改築の際に散逸したものもあります。往時における新鋭の教育研究機器類が、なお随所に分散して保存されています。貴重なこれらの資料を体系的に展示して、先人の英知と努力の結晶に直接触れることは、

研究教育上真に有意義なことであると信じています。これがまた設立の趣旨でもありません。

この構想が実現したのは二村富久氏の支援の賜物です。二村氏は昭和十六年十二月東京物理学校理化学部を卒業、その後兵役につきましたが、復員後昭和二十二年に二村化学研究所を設立しカラメル製造を開始、その後、社名を二村化学工業株式会社に改めセロハンの製造販売を手掛け、現在ではこの業界のトップ企業に育った努力の人です。

氏は物理学学校の校風をこよなく愛され、且つ又、青少年の精神荒廃を深く憂慮しておられる高潔な人格者であります。戦後の大学教育では高度な技術の習得のみに傾き、人格陶冶の修練に欠けたまま社会に送り出される状況を憂い、本学学生が社会に有為な人材として育つよう精神教育高揚のため、昭和五十八年同社の株一〇〇万株を学園に寄贈されました。学園はこれを二村基金とし、その果実により学生を対象とした講演会等を催し人格陶冶に努めて参った次第です。このように氏は夙に母校の発展、学生の育成に心を向けられておりました

が、昭和五十八年に東京理科大学維持会会長に就任されて学園の経済的支援を積極的に推進されて来ました。

氏は現在、社長を辞任され会長職に就かれておりますが、博物館建設構想に賛同し、その建設費として私財十三億五千万円を学園に寄贈され、今日開館の運びとなった次第です。

学園は氏の志に対し近代科学資料館に二村記念館の副称をつけると共に一階エントランスホールに氏の銅像を置き永くその素志を称えることと致しました。

建物の外観は明治三十九年に新築された木造二階建の校舎の復元です。当時の建築場所は現在の六号館に相当する位置(当時の地番、牛込区神楽町二ノ二四)です。復元の方法は当時の写真を参考に模型を作り設計図を起し、明治時代の建築様式を忠実に再現しており、建物自身も展示物となっております。

展示場は大きく三つのコーナーに分けられます。一階エントランスホールより右廻りに流れますが、最初が学園史コーナーで、学園の歴史を示すパネル、維持員先生の写真、物理学学校校旗等を展示しております。また、図書館が保管しております。また、図書館が保管しております。また、貴重な和書、例えば福沢諭吉著「西洋事情」等、あまり目にふれることのない珍本を展示します。なお、このコーナーには本学が保存する実験器具、例えば開成学校製作の水準器、電磁誘導原理を説明する手廻し発

電機等も展示されております。

ホール中央にはエンジン発明の電気自動車の実物が展示されておりますが、これは大変貴重な資料です。

次のコーナーは計算器具のコーナーです。この資料は内山昭氏(東京理科大学諏訪短期大学教授)が永年収集されたものを基に構成されております。算木からソロバン、計算尺、手動計算機、更には本邦最初の電子計算機等々、計算器具の歴史を学ぶことの出来るコーナーです。

最後のコーナーはエンジン発明品コーナーでエンジン発明品の実物を展示してあります。主なものは錫箔蓄音機・炭素電球・エンジン扇風機・蓄電池等々。近代科学の黎明期の器械に直接触れることができます。

以上、近代科学資料館の概要を説明しましたが、現在、鋭意展示物の整備に当たっておりますので、開館の暁には是非ご覧くださることを期待しております。